

# 日本語教授法における初級教科書分析 －文法について－

中村 妙子

## 1. 教科書分析

国際基督教大学教養学部の授業に日本語教育の教師養成の一環として、「日本語教授法Ⅰ、Ⅱ」がある。学生たちはこの授業の前に「言語学概論」、「日本語学概論」、「日本語教育理論」の授業を履修しておく。国際基督教大学（ICU）の教師養成全般にわたっての論稿は先にいくつか述べられたものがあるので本稿ではふれない。「日本語教授法Ⅰ、Ⅱ」であるが、秋学期にだされる「日本語教授法Ⅰ」では、日本語教育全般に関する講義、日本語教育初級教科書の分析を行う。その他、学生はICUの日本語教育プログラムの初級クラスの見学、日本語学習者とペアを組んでチューター活動がある。冬学期の「日本語教授法Ⅱ」では種々の日本語教科書分析、模擬実習、中級クラスの見学、チューター活動がある。

### 1) 目的

初級教科書分析の目的は、日本語教育の初級で一体どのようなことを学習者は学習するのかを把握するためである。日本語教育において初級で学習する項目、事柄についてはある程度、共通理解があると考えられる。それ故、一つの教科書を分析することにより初級についての理解をする。また、教授法のⅡで行う模擬実習において、自分が分析した課を担当し実習の際にも役立てる。

### 2) 方法

学生は日本語教育プログラムで使用している初級教科書「Japanese for College Students: Basic 1,2,3」を1課ずつ分担し、その課で何を教えるのか、また、それはどのように課の中に教材化されているかを分析し、報告する。報告に対して学生、教師からコメントや質問が出され討議する。

## 2. 教科書についてのアンケート

本稿を書くにあたって教科書分析をした教授法の受講生にアンケートを行った。アンケートは外国人学習者に対して、教科書が「全体の印象」、「課の構成」、「現代日本語の話し言葉のモデル」、「話題・場面」、「文法項目」に関して適切なものかどうかについて調査したものである。本稿ではその中の文法に関する項目について述べる。その他の項目は稲垣滋子「機能シラバスから見た”Japanese for College Students”－日本語教授法受講性のコメントから－」で考察されている。アンケートも参照されたい。

この文法ということであるが、現在作成される教材は、構造的なものは前面から下げ、言葉を機能面、運用面からとらえることが重要視されている。ICUの教科書が作成される段階でも議論を重ね、文法は骨であり機能は肉であるという言葉があったが、この教科書においてもその点は腐心したことの一つである。そして、ICUの教科書には、他の初級教科書に盛られているいわゆる初級文法事項は網羅されている。この意味でも、本稿では文法面に絞って考えたい。

### 3. アンケートの結果

アンケートは32人に配られ、9人分が回収された。記入型のものなので、回収されたものは細かく記入されている。文法に関しては質問3の「Grammar Notes に対するコメント」、質問6「初級文法項目として適切か」と質問7の自由記述が当てはまる。以下にその答えを見ていく。

#### 質問3「Grammar Notesについて」

##### プラスのコメント

分かりやすい（3名）／よい／非常に簡潔に必要なことがまとめられ、発想、文化にも触れている／日英対象によく書かれている

##### マイナスのコメント

説明が長すぎて分かりにくかったり、短すぎて分かりにくかったりする／授業中教科書をみないのなら、フォーメーション、ドリルはGrammar Notesと同じセクションで扱われれば良い／日本人でないと分かりづらい説明がある

コメントから見ると初級としてGrammar Notesの説明は適切であるというのがほとんどである。簡潔にまとめられ発想、文化にも触れ良いというコメントである。マイナスのコメントはプラスの評価と反対に、説明が分かりにくいというものである。概して、Grammar Notesに関しては高い評価といえるだろう。

#### 質問6「初級の文法項目として適切か」

##### 適切（7名）

適切でない（2名）理由：かなり高度な文型を学ぶのに驚いた／チューティーの学習者がむずかしそうだった

文法項目としての適切さについては適切であると答えている。教授法の学生は、この教科書分析に先立って、日本語教育の初級で取り上げられる項目、特に文法項目については共通理解があり、どの教科書も大差のないということを知っている。そのため、文法項目の取り上げ方については異論がないと考えられる。適切でないというコメントも「高度な文型」ということは難しいという判断だと思うが、学習者にとって難しそうだったというのは、文法項目がこの教科書に入れられるべきかどうかということではなく、難しいと判断

するにはいくつかの要素を考えなければならない。教え方の問題か学習者個人の学習態度、能力の問題なのかを検証しなければならない。

質問6にはさらに「文法項目で興味を引いたものがあったら例を挙げて書いてください」というものがある。

答え：初級でこれだけ学べるのかと驚いた／敬体と常体をどのように使い分けるのか／

「は」と「が」の使い分けで、英語との対応を考えると難しい／使役の「に」と「を」について「に」はlet, 「を」はmakeという説明であった、それだけで、説明しきれんだろうか／会話体の説明が不十分で、学習者がどれが会話体なのかよく分かっていない場合があった／countersに興味をもった。

文法に関して受講生たちに興味を引いたことがらが述べられている。敬語の使い分けをどのように説明するのか、あるいは、「は」と「が」をどのように説明するのか。使役の「に」と「を」の説明についてのものである。どちらも、Grammar Notesに最初の段階のことは説明されているのだが、その説明でカバー出来ないもの、あるいは、初級の基礎的なものの次にある事柄についての疑問であろう。会話体あるいは会話で使われる表現については、教科書で十分説明がなされていないければ、教師がおぎなっているのだろうと思う。序数詞については、母語においては気づかなかったことを、改めて気づかされたものと思う。

質問7「その他気づいたこと」

答え：場面を中心に基本文型が積み重ねられているが、系統的に文法事項を整理した副教材がなくても混乱しないのだろうか。日本人的感覚では、先に文法全体像を把握しないと不安である。

文法事項を体系的に整理した形で学習しなければ混乱するとの意見である。体系的というのがどのようなものを指しているのか不明であるが、場面、機能の中で提示されるのであるから、文法項目がバラバラと提示されているととらえたのかもしれない。構造的な文法シラバスではないのだから当然であろう。

#### 4. 教授法の学生と日本語教育の文法

この教科書の分析は1995年、1996年の2年間の教授法のクラスで行われたが、この教科書にまとまる前の準備段階の版をJLPで使いだしたときからこの教材の分析をしてきた。また、この教材分析は、教授法のコースの最初の頃から行われていたものと思う。

筆者が関係した1977年にはすでに行われ、「Modern Japanese for University Students, Part I」, 「にほんご／にっぽんご」の教科書を分析してきた。

教授法の学生は、この授業を受ける前に「言語学入門」「日本語学概論」を履修して

いるので、言語の分析のしかた、言語をどのようにとらえるかは知っている。しかし、9月入学生、外国人学生を除けば小学、中学、高等学校でいわゆる学校文法を学んできている彼らにとって、日本語教育の文法は目新しいものであろう。文法用語にしても今までの知識とは異なるものがある。いくつかのものを取り上げてみよう。

動詞の分類：動詞を「irregular verb」「consonant verb」「vowel verb」の三つに分ける。これは、それぞれ変格動詞、一段動詞、五段動詞と考えれば、これまでの知識で分かることだ。しかし、一段動詞であればいわゆる語幹が子音で終わっているため、このネーミングであること、五段動詞は語幹が母音で終わっているためであることに気づくことは新しい発見であろう。

助動詞、助詞：学校文法では助動詞、助詞にあたるものが日本語教育では動詞、形容詞の\_\_nai形、\_\_te形であるとか、希望を表す\_\_tai形、助詞は動詞、形容詞の\_\_tara形、\_\_ba形というように説明することは新しい観点であって興味深いものであろう。

形容動詞：形容動詞をこの教科書ではA N = adjectival noun (e.g. 'genki', 'hima')としている。形容動詞を名詞の一つのグループと考える。名詞を修飾するには助詞「な」を付け「元気な子供」となることを学習者に喚起することなどは、学校文法で学んできた者には新しい発見であろう。また、形容動詞を「な形容詞」として教える日本語教育の文法もあることも知り、日本語教育用の文法では、教えやすさ、分かりやすさを重視しているものであることが分かるであろう。

その他：条件の表現として、「と」「たら」「なら」「ば」があり、初級学習者にその相違を教えるには、どのような説明をするのか。授受表現では英語の "give" が、動作主、受手によって異なる表現を使う日本語の特徴を認識する。受身では日本語に特徴的いわゆるめいわくの受身が学習者の言語にないのがほとんどであることに気づく。敬語も自分を中心として、待遇が変わることを初級のレベルとして簡潔に平明に説明しなければならない。

## 5. おわりに

日本語教育の初級文法では、複雑なものであっても、出来るだけ簡潔に混乱を起こさないように文法を提示し説明する。さらに、この "Japanese for College Students: Basic" の教科書では、その文法項目を、機能、場面とともにその課の "Objectives" の中で学習していく。そのことが適切に教材化されているこの教科書において、文法項目がどのように場面化され、機能の中で運用されているかを分析し、学ぶことは教授法の受講生にとって重要なことであり、有用なことである。

教授法の受講生は教科書を分析し、実際の教室活動の見学によって教科書がどのように使われているかを観察する。チューターとして留学生に接していくことにより、教科書が

どのように学習者に理解されて、日本語の運用能力が養成されていくのかを見ていく。このような日本語教育に関係する経験、過程のなかで、日本語教育の教授能力の基礎として、この教科書分析は重要なものとして位置付けられる。